

『カンボジア王国の学校教育と教員養成に関する現地調査』

報 告 書

(2008年12月)

山口大学教育学部

阿 部 弘 和 小 粥 良 和 泉 研 二

目次

はじめに	
I 現地調査の目的	阿部弘和
II 調査の日程と主な活動内容	阿部弘和
III JICA のカンボジアにおける教育分野での援助活動	小粥 良
IV カンボジアの理科教育の現状と課題 -具体的な支援のあり方を求めて-	和泉研二
V 国際協力と途上国への援助活動	阿部弘和
おわりに	

はじめに

途上国への支援活動はこれからの大学に課せられた重要な責務の一つである。山口大学教育学部は平成 18 年 3 月には教育における国際支援をめざし、JICA 中国と『包括連携協力事業の覚え書き』を交わしている。また、平成 19 年には山口大学に国際協力を推進する組織として『国際協力活動推進プラットフォーム』が設置されている。しかし、教育学部は実際には、組織としての途上国への国際的な教育支援活動や事業への参加は行われていなかった。

そこで、平成 20 年春に、教育学部教員有志が集まり、教育における国際協力・支援活動を実施するために「教育国際支援プロジェクト」チームを発足させた。そして、

- (1) まず、途上国に赴き現状を観察分析し、課題を発掘する。また、国内でも情報を収集する。
- (2) 2008 年度中にバングラデシュ、カンボジア、ラオス、または、ベトナムのいずれかの国へ 10 日間程度の調査旅行を実施する。
- (3) 準備期間を経て、その後国内外の行政機関、JICA、NGO 等と連携をはかりながら教育に関する国際支援プロジェクトを計画、実施する。

こと活動計画とし決定した。

今回の「カンボジア王国の学校教育と教員養成の現状と問題点に関する現地調査」はこの計画に基づき実施したものであり、「教育国際支援プロジェクト」のメンバーである阿部弘和（理科教育教室）、小粥 良（国際理解教育教室）および和泉研二（理科教育教室）の 3 名が参加した。

I. 現地調査の目的

阿部弘和

途上国への教育支援活動は大学に課せられた責務の一つであり、平成 20 年に教育学部ではそれを具体化するため「教育国際支援プロジェクト」チームを組織した。このプロジェクトは、カンボジア、ベトナム、バングラディシュ等の途上国に対して、教育養成や学校教育への支援活動を行うことを目的としている。しかし、学部としての途上国での教育支援活動の実績・経験がなく、直ちに具体的なプログラムを展開できる現状にはない。そこで、準備段階として、学校教育や教員養成の現状を調査分析し、課題を発掘することを目的として途上

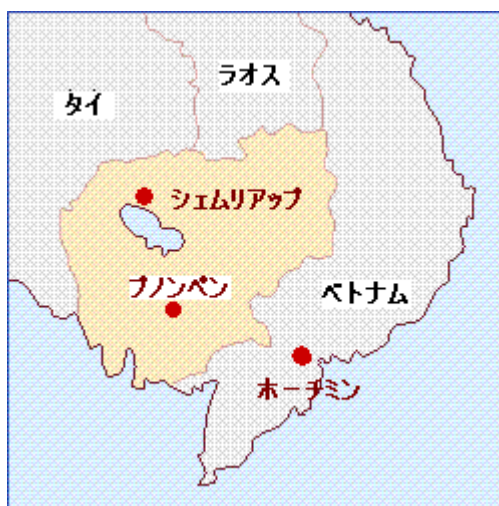
国の一つであるカンボジア王国（Kingdom of Cambodia）に調査の旅を行うこととした。

調査に於いては広島大学国際協力研究科や JICA の協力をあおぎながら、シェムリアップ市およびプノンペン市を拠点として、ササースダム郡の小中学校をはじめ各地の学校を訪問し学校教育の現状や問題点を調査する一方、TTC（教員養成学校）、NIE（国立教育研究所）なども訪問し教員養成の現状や問題点を調査した。国際的な支援事業においては求めるものと支援活動の内容が一致しない場合がある。今回の、現状を認識し、案件を発掘する現地調査によって、将来において、より実践的効果的な教育支援活動がはかられるものと思われる。

II 訪問先と活動内容

阿部 弘和

調査旅行期間は 2008 年 10 月 5 日～10 月 16 日。ベトナムのホーチミン市経由でカンボジアに渡航し、シェムリアップ市とホーチミン市を拠点にして、調査活動を行った。以下に訪問先と主な活動を列記する。



1. CHONG KHNEAS 小学校

日時：10月7日 午後 場所：トンレサップ湖

主な活動：①校舎の見学 ②設備の見学 ③授業参観

CHONG KHNEAS 小学校（チョン・クニエス小学校）は非常に貧しいベトナム系カンボジア人が湖上生活（移動式船を住居とする）をするトンレサップ湖にある湖上小学校であり、チョン・クニエス村唯一の学校である。校舎は移動式大型船で、2棟（隻）からなる。1棟は日本の NGO（J S A C : Japan Assistant Team for Small Arms Management in CAMBODIA）が 2005 年に建設、もう 1 棟は韓国の NGO によって建設された。なお、トンレサップ湖では、岸からかなり離れた湖上にあるベトナム系住民用の学校の校舎も見学した。

2. シェムリアップ PTTC

日時：10月8日 午前 場所：シェムリアップ市

主な活動：①付属小学校の校舎、教室、設備を見学 ②付属小の授業見学

③PTTC の校舎、教室、設備を見学 ④PTTC の授業参観

⑤ 食堂・売店、運動場、BTC（Belgshe Technishe Cooperative）・CTB(Cooperation Tecnishe Belge)のプロジェクト・マネジメント・オフィス（いずれもベルギーの援助で建設）なども含め、PTTC のキャンパ

ス見学。

- ⑥JICA から PTTC に派遣された青年海外協力隊 (JOCV :Japan Overseas Cooperation Volunteers) の鍵山彩青年海外協力隊員 (音楽担当) と面談
- ⑦TTC director (学長) の Leav Ora と面談

カンボジアの小・中学校の教員は PTTC (Provincial Teacher Training Center) と RTTC (Regional TTC) で養成される。PTTC (小学校教員養成学校) は 18 校、RTTC (中学校教員養成学校) は 6 校ある。養成制度は主にフランス (ヨーロッパ) の師範学校制度に基づく。就学年限は 2 年。同校の校舎や教室、設備等については鍵山彩青年海外協力隊員の案内によって見学し、また、同氏よりカンボジアの学校や教員養成制度等の現状や問題点について詳細な説明や情報提供を受けた。

3. ワット・ポー小学校

日時：10 月 8 日 午後 場所：シェムリアップ市

- 主な活動①校舎、教室、設備を見学 ②授業参観 ③売店なども含め、校内の施設見学
④田中千種青年海外協力隊員 (音楽担当) と面談
⑤田中氏が組織し指導する音楽隊 (合奏クラブ) 活動を参観

カンボジアの教育は Ministry of Education, Youth and Sport (教育青年スポーツ省) の管理下にあるが、同時に分権化もすすめられている。ワット・ポー小学校は校長の運営手腕によって、設備、運営、教育面で父兄からも高い評価を受けていて、この学校への入学希望者は多く、約 10 年間に生徒数はおよそ 20 倍になった。この学校ほど優れた教育環境をもつ学校は日本にはあるだろうかとの印象を持った。なお、田中千種氏が作成した資料を巻末に載せた。カンボジアの学校教育の現状や課題が非常によく理解できる優れた資料である。

4. パクパン小学校

日時：10 月 9 日午前 場所：プク郡 (パクパン村)

- 主な活動 ①校舎、教室、設備見学 ②勤労奉仕活動見学

2つの村から児童が通学する、7クラス、児童 282 人、先生 6 人 (校長も含む) の典型的な田舎の小学校である。しかし、校舎、井戸、黒板などは各国の援助によって整備されていた。今回の調査で参観した学校など教育施設の全てには諸外国からの援助がみられ、カンボジアは被援助大国であると感じられた。しかし、この学校にはトイレが 1 個しかなく、援助のありかたには問題が残されている。なお、2008 年 10 月より木曜日午前は勤労奉仕作業の日 (政府の方針と思われる) となり、この学校では校庭の清掃作業が行われていた。が、近隣の他の学校では実施されていなかった。

5. ササースダム郡中核小中学校

日時：10 月 9 日午前 場所：ササースダム

- 主な活動：①校舎、教室、設備の見学 ②校内にある売店、井戸など施設見学
③中学校の授業参観 ④職員室、図書室など見学

小中あわせて生徒数は約 900 名。近隣の学校 (サテライト校と呼称) の教師の研修も定期的に行われる、ササースダム郡の中核となる学校である。ここでは、JICA とカンボジア政府による「カンボジア復興支援プロジェクト」が実施され (平成 19 年終了)、広島県と広島大学の教育関係者によって学校経営や教科指導法などを内容とする研修などが行われた。現在はシェムリアップ PTTC にあるベルギーのプロジェクト・オフィスに駐在するスタッフから定期的な支援を受けている。中学校の校舎はベルギーの援助により建設されたが、デザインなど日本では見られないような非常に快適な教室となっていた。しかし、教科用の準備

室などはなく、教師用の部屋として共同の職員室や会議室・倉庫兼図書室などがある程度であった。授業を行う教室以外にはほとんど部屋がないという状況は、カンボジアの学校では普通である。また、中学校では授業が行われていたが小学校はまだ2学期が始まっていなかった。カンボジアでは大学も含む学校の2学期は10月から始まるとされているが、いつから新学期が始まるかは地域、学校によって異なっている。日本では普通の「一斉に」という言葉はカンボジアでは通用しない。政府関係者によると、とにかく10月中旬頃までには新学期が始まるということであった。各地でお盆のような行事があり、それに合わせて新学期の日時が決まるためであるらしい。

6. JICAカンボジア事務所

日時：10月13日9：15－11：00 場所：プノンペン市

主な活動①堀田桃子教育セクター担当者と面談 ②JICAプラザの見学

JICAカンボジア事務所教育セクター担当の堀田桃子氏より、カンボジアの教育や教員養成の現状や課題、教育に対する政府の考え方や方針、JICAの活動、諸外国からのカンボジアに対する援助活動の現状や問題点などを中心に資料を駆使した詳細なレクチャーを受けた後、意見交換を行った。また、同席されたJICAプラザの小川紀子氏からも有益な情報やアドバイスの提供を受けた。現在カンボジアには諸外国の多数の機関による援助プロジェクトが殺到している。プロジェクトの内容の重複をさけ、それぞれの活動を円滑かつ有機的にすすめるための連絡会議の日程の調整さえ困難とのお話が印象的であった。

7. NIE (National Institute of Education) 国立教育研究所

日時：10月13日 午後 場所：プノンペン市

主な活動①NIEの校舎、教室、設備の見学 ②付属高校の校舎、教室、設備の見学

③付属高校の授業参観

カンボジアでは大学卒業後（4年間）NIEで教職に必要な内容を1年間修学して、高校教員の資格が与えられる。また、TTCの教官になるためにもNIEを卒業することが必須となる予定である。カンボジアの教育政策は、現在教育省の長官（Secretary of State）Nath Bunroeun氏が主導的な役割を果たしているようで、彼の指針に従って、少なくとも教員養成は制度的には整い、実行の段階に達したようである。

NIEの講義室の広さ、設備は日本の大学のそれらとほぼ同じである。NIEではカンボジア政府とJICAによるプロジェクト（STEPSAM：理数科教育改善計画）が行われ、日本の大学（名古屋大、三重教育大など）の教官によって理数科教育の改善（教科の内容など）が行われた。しかし、理科室などの設備や器具などは日本の高校程度であった。また、NIEの教員は共有の居室はあるが、教員が専門的な研究を行うための研究用実験室はない。

付属高校も参観したが、教室の広さ、設備、生徒の服装や持ち物などは日本のそれらとほぼ同じで、生徒の活動ぶりや雰囲気も日本の高校生と同じなのが印象的であった。

8. STEPSAMII オフィス

日時：10月13日午後 場所：プノンペン市（NIEキャンパス内）

主な活動 ①村山哲也氏を含む5名の日本人プロジェクト・スタッフと面談

STEPSAMII（Science Teacher Education Project II）はカンボジア政府とJICAが行う理科教員の資質向上を目的とする、2008年にスタートした事業である。実際の活動には広島大や岡山大などの理科系教員が参加、主導的な役割を果たす予定である。村山哲也氏やこの事業の運営を担当するパデコ社のスタッフからこのプロジェクトの内容について詳細なレクチャーを受けたのち、この国の教育政策、学校教育、教員養成など広範な話題で意見交換を行い、実際的で有益な情報を得ることができた。

9. RUPP (Royal Univ. of Phnom Penh) 王立大学

日時：10月14日 午前 場所：プノンペン市

主な活動 ①校内施設見学 ②理学部棟見学 ③理学部講義室、実習室、設備見学
④講義参観 ⑤生物実習、化学実習などを参観

カンボジアの大学で、構内は広く、緑に囲まれた建物は6階建てで近代的な大学の外観をしている。講義室は日本とほぼ同じ構造と広さ。しかし、教官の個室はあっても、研究用の実験室はない。大学教員は授業をするのが主務で、研究活動が無いのが普通であるためか教官の専門性は高くないように見受けられた。実習用の理科室の設備は高校程度である。授業の内容は基本的なものであったが、学生の受講態度は極めて良い。理学部の定員は1学年250名、教官数は80名ほどであった。

10. CJCC (Cambodia-Japan cooperation Center) 日本センター

日時：10月14日 午前 場所：RUPP 構内

主な活動 ①施設見学

RUPP 構内にあり、経済や人材交流を目的とした JICA が運営する恒久的な施設である。広々としたホールを中心に、コンピューター室、セミナー室、図書室、集会用のホールなども備えた、極めて快適な近代的な建物である。センター内には日本関係の文献や、日本へ留学するための資料などがよく整理され準備されており、また、談笑する学生の姿が見られた。

11. カンダール・コンボンチュナム RTTC

日時：10月14日 午後 場所：カンダール州コンボンチュナム

主な活動 ①校内施設見学 ②講義室見学 ③理科実験室、器具見学 ④授業参観
④寮見学 ⑤千田沙也加青年海外協力隊員（理科教育担当）と面談
⑥副学長 Loic Celcilio 氏と面談

PTTC（小学校教員養成学校）がその州内の小学校教員の養成校であるのに対して RTTC（中学校教員養成校）は周辺の数州の中学校教員の養成を担っている。この RTTC の定員は1学年300名で、2年間の課程を終え、教員の資格を得る。千田沙也加と面談し有益な情報を頂いた。千田氏によると授業は中高の内容を復習し記憶することが主体で、「なぜ」とかの本質的な理解はなしのまま卒業するようである。理科科目においても同様で、観察はあっても実験はない。日本から贈られた顕微鏡が梱包されたまま放置されたままであった。しかし、学生の受講態度は礼儀正しく極めてよかった。授業時間は60分を基本とし、午前は7時-11時、午後は14時-17時。土曜日でも午前の授業はあり、すべて出席する必要があり、学生は非常に忙しい。

12. その他

ある国で活動する場合、そして、教育支援をする場合も、その国の人々の暮らしを知ることは極めて基本的で重要・必須な事である。この調査旅行においても、カンボジアの人々の暮らしぶりを知るため、学用品、日用雑貨、食料品などに注目しながら各所の市場（商店街）などを積極的に見学した。また、住居（家庭）も見学させてもらった。

以下のページに阿部弘和撮影の写真の写真を資料として載せた。



図1. トンレサップ湖上学校

上2枚：チョン・クニエス小学校

左：キリスト教系 NGO によるベトナム系
住民用の学校



図2. シェムリアップ PTTC

左上：付属小学校 上右：PTTC 講義室

下左：ベルギーが建設したビジターセンター
下右：PTTC の音楽の授業



図3. ワット・ポー小学校

経営努力によって教育の質が高いと評価される学校。カンボジアでは学校には売店兼食堂があり生徒児童は自由に利用できる。ここにはオシャレなクレープ屋さんまで出店していた。



図4. パクパン小学校

3教室の校舎の典型的な農村の小学校。勤労の奉仕の日で校庭を掃除する児童。教室の中は机が古い木製であることをのぞけば日本のそれと大差ない。新しい黒板は韓国のNGOからの寄付。



図5. ササースダム郡中核小中学校

ベルギーの支援で建設された中学校校舎は、机も新しく、快適な教室となっていた。生徒達は休み時間になるとオヤツを食べに、校内の端にある食堂に駆けつける。



図6. NIE (国立教育研究所)

1 列目：附属高校の校舎と教室 2 列目左：NIE 敷地内あった小学校。人口が多い首都プノンペンでは小学校の3階化が既に進行中。2 列目右・3 列目：講義棟と教室。4 列目：生物実習室と物理実習室



図7. RUPP (Royal Univ. of Phnom Penh) 王立大学

1列目左：理学部校舎 1列目右と2列目左：生物の講義と学生 2列目：化学実験実習
3列目：左は生物実習室、右は化学実習室 4列目左：教員個室 右：緑が多い公園風大学構内



図8. カンダールコンポンチュナム RTTC
講義棟と授業風景。右下は女子寮。



図9. 国道6号線ぞいの学校

国道6号線はタイ国境からプノンペンを結ぶ重要な幹線道路である。車窓から見えた学校は全てコンクリート製の新しい校舎に建て替えられていた。

Ⅲ JICA のカンボジアにおける教育分野での援助活動

小 粥 良

近頃、日本のある民放テレビ番組では、芸能人の描いた絵などをオークションにかけ、その売り上げを資金に、カンボジアに学校の建物を寄付するという企画が評判になった。番組で紹介されていた僻地の村の学校は、屋根しかないような、粗末なものだった。今回の調査で視察したシェムリアップおよびその近郊、シェムリアップからプノンペンへの移動の際に車中から見た国道沿い、そして首都プノンペンでは、学校の建物自体は、むしろ立派といえるほど、しっかりしたものであった。これらの地域は、既に地雷も撤去され、治安がよく、開発も進んでいて、援助を実施しやすいため、既に多くのドナーが入り込み、プロジェクトを推進している。JICA のカンボジア事務所（プノンペン）で受けた説明によると、今後援助を推進していくためのドナー間の協調態勢を作っていくことが、現時点での重要課題となっているとのことであった。ドナー協調のための会議を調整するだけでも大変な作業であり、時間と労力を要する。見方を変えれば、すでにそれだけ多くの支援国、支援団体（国際機関、NGO）が入り込んでいるということになる。JICA カンボジア事務所のウェブ・サイトに掲載された情報によれば、カンボジア政府が受けている援助の総額は 594.8 百万ドルであり、これはカンボジアの国家歳入の 63.9% にも及ぶ（2006 年）という（http://www.jica.go.jp/cambodia/office/pdf/circumstances_01.pdf）。

JICA は、カンボジアに対してさまざまな援助を行っているが、教育を人的資源開発（人材開発）の一環と捉え、「よき統治」（good governance）と経済発展を繋ぐものと位置づけている。具体的には、学校建設などの無償資金供与、本邦研修（日本での研修）、青年技術研修などが行われている。学校建設は、主に都市で行われているが、これは、先にも触れたように、安全を確保できることから着手しているということであろう。また、地方は、JICA が進出すると NGO を圧迫する恐れがあること、ADP や世銀がすでに進出しているということもある。都市では広い土地を確保することは難しいので、上へとスペースを求めざるをえず、3～4 階の建物である。このプロジェクトは、フェーズ 1 で 111 教室を、フェーズ 2 では 5 校を建設し、フェーズ 3 は、現在調査団が来ていて、来年秋か冬以降に建設開始の予定である。本邦研修は年間 5～6 本実施しており、1 本 1 名で、基本的に各国 1 名の派遣となる。（現在は、他の諸国からの研修生と混成で集団研修を行うのが通常で、カンボジアに特化した国別研修は今後数年間行う予定は無い。）教員の研修の場合、産業発展に繋がる理数科を重視するようである。本邦研修の期間は長くて半年で、平均 2、3 ヶ月であり、ある特定の技術を習得することを目的とする。青年技術研修は、以前は文化交流ベースで、親日家を育成するためのものだったが、昨年からリフォームされた。現場の言語で研修を行い、理数科教員、初等科教員というパッケージになっている。山口近辺では、JICA 九州センター、中国センターが取り扱っており、九州センターは EDU という団体が実施している。また、JICA はプノンペン市教育局、シェムリアップ市教育局と連携しつつ、PTTC, RTTC などの教員養成校に青年海外協力隊（JOCV）を派遣しているが、理数科のボランティアをどんどん入れていきたいと考えている。その他に、NGO との連携事業もあり、今後 3 年間のプロジェクトとしては、広島大学との連携による理数科に特化したプロジェクト、曹洞宗の国際ボランティア団体「シャンティ」との連携による移動図書館のプロジェクト、また、元マラソン選手の有森裕子さんが代表理事を務める NPO との連携事業として、カンボジアの小学校の体育のカリキュラムと指導要領を作るプロジェクトがある。その他に、カンボジア教育省の教育研究局（PRD）や USAID と連携して、カリキュラム策定に関わる援助を行っている。

今回の現地調査では、いくつかの教員養成校を訪れたが、それらの学校にも JICA から派遣された JOCV 隊員がいた。（唯一の高校教員養成校であるプノンペンの NIE の場合は、JOCV 隊員はいなかったが、JICA のプロジェクト・チームが入っていた。）教員養成校ではないが、シェムリアップのワット・ボー小学校で出会った田中千種隊員の活動には、大変感銘を受けた。この学校は一種のモデル校であるらしく、生徒も先生も制服を着ていて、美し

く整った佇まいの学校であった。田中隊員は北海道出身で、北海道で臨時教員として数年勤めた後、JOCV 隊員としてカンボジアに来た。当初は言葉もわからず、苦勞したようだ。音楽の担当であるが、カンボジアでは音楽は正規の教科としては存在しない。彼女の特定のカウンターパートはおらず、校長から、すべての先生をカウンターパートと考えるようにと言われたという。先生たちも、譜面を読んだり、楽器を演奏したりということができない。音楽教育が存在していない国のことなので、当然である。実は、ワット・ポー小学校の前に訪れたシェムリアップの PTTC ですら——音符という概念から教え始めるところを目撃したのだが——「ド」という音符ひとつを教えるのに、かなりの時間を費やしていた。そのような状況の中で、田中隊員はワット・ポー小学校に、ピアノを中心とした合奏クラブを編成したのである。ピアノは、日本の元勤務先や、廃校でいらなくなったところから贈ってもらった。校舎と教室はあっても、音楽室や楽器の備わった学校など、カンボジアにはほとんど無い。あるとしたら、通常それは教員養成校だが、ワット・ポー小学校の音楽室は、教員養成校のものより充実しているほどだった。ピアノと太鼓で子どもたちの合奏隊が、急遽、私たちが歓迎するためにミニ演奏会を開いてくれた。ピアノの演奏、合唱、打楽器の演奏と、何曲も、実に生き生きと楽しそうに披露してくれた。正規の教科ではないのに、子どもたちは音楽が大好きで、合奏隊の人気は高く、どうしても入れてくれという子どもが押し寄せてくるという。合奏隊員の子どもたちは、授業の合間の休憩時間にも自主的に集まって、校庭でピアノの練習をしていた。

経済発展のためにはまず理数科をとというのも、なるほど、それはそうだと思うが、音楽や美術、スポーツといった人間の全体的能力の育成についても、やはり近い将来、真剣に取り組まれる必要が認識されるときが来るだろう。それらに対する飢え渴き、欲求といったものは明らかに存在している。また、近年の過酷な歴史で傷ついた国だからこそ、情操教育に大きな意義があるのではないだろうか。箱作りも大事だが、内容に対する支援を考えるべきときに差し掛かっていると思われるカンボジアで、田中隊員のひたむきな努力に、何か大切なヒントが隠れていると感じた。

IV カンボジアの理科教育の現状と課題 -具体的な支援のあり方を求めて-

和泉研二

山口大学教育学部の有志で立ち上げた「発展途上国への教育学部教育国際支援プロジェクト事業」の一貫として、途上国に必要な適切な支援とは何かを探るため、現地の小学校、教員養成学校、大学等の実地調査を行った。ここでは、理科教育の視点からカンボジアの教育の現状と課題を報告するとともに、具体的な支援のあり方についての私見を述べる。

1. カンボジアの教育事情（歴史的経緯）

1975年からの3年間、ポル・ポト政権下にあったカンボジアでは、総人口の約1/3が殺害されたという。人的にも施設のにも教育基盤が崩壊した時代である。ポル・ポト政権後、ベトナムの支援で誕生したヘン・サムリン政権は、一から教育制度を立て直す必要があった。人材難のため、当初は、読み書きさえできれば先生になってもらっていたことも少なくない。その後、1991年のパリ和平条約、1992年からの UNTAC 駐留を経て、急速に発展する平和な国となり、今日では国連や先進国からも多くの支援を得ながら、教員の質や教育システム、教育内容の充実・再構築に取り組んでいる最中にある。

2. カンボジアの小学校の特徴

2-1) 2交代制

カンボジアの学校制度は日本と同じく、6・3・3制である。小学校では子供の数も多いため、午前と午後の2部制をとっている学校が多い。今回訪問したトンレサップ湖の湖上小

学校、アンコールワット遺跡観光の拠点都市であるシェムリアップの小学校教員養成学校付属小学校およびワットポー小学校、シェムリアップ近郊のサーサーダム郡中核小中学校は、いずれも午前（7時～11時）と午後（13時～17時）の2部制であった。2部制は、子供たちだけでなく、教員も2部制をとっており、午前のクラスを担当した先生は、午後には帰って、午後の部の先生と交代する。つまり、自分の授業があるときしか学校にはいない。学校の先生は給料が安く（小学校の先生で月50ドル以下であり、カンボジアでの他の職業と比較しても低い方であるとの話）、帰って別の仕事をする先生が少なくないということであった。学校に残って授業研究や教材研究を行うということは一般的にはあまりないようだ。

2-2) 教科書に実験がない、理科室もない

国立教育研究所（NIE：National Institute of Education）で小学校の理科の教科書を見たが、子供に実験を行わせるような記述はこれと見当たらぬ。一方で、日本の教科書にはないかなり高度な内容が所々に紛れ込んでいた。教科書やカリキュラムのフレームワークは教育省の担当部署が検討を進めているとのことであるが、まだ十分に系統だったものにはなっていないとの印象である。教員養成校のカリキュラムも、教科書の内容やカリキュラムをフォローしきれていないように思われるとのことであった。

教科書にない以上、実験する必要がないので理科室もない。従って準備室もないし、実験器具もない。カンボジアの理科の授業形態は、他の授業と同じく一斉授業である。教員が黒板に板書し、児童・生徒が書き写す。時々教師が質問し、生徒が答えるという授業であり、理科室がなくても授業は進められる。卵が先か鶏が先かではないが、理科室がないため、理科の教科書に日本の小学校で行っているような実験を無理に入れることはできないということかも知れない。

2-3) 教科書も行き渡っていない

建前上は全員に無償配布されているはずだが、現実には、児童・生徒はもとより、教師にも教科書は行き渡っていなかった。これは、プランニング不足や配送段階のトラブル等に問題があるのではないかとの話であった。

JICAの担当者の話しでは、カンボジアの教科書は、教育省が策定・印刷・配布してきたが、2006年に、「教科書は民間が作成し、教育省は審査・認定する」というアナウンスがあったそうである。しかし、現実はそのようになっておらず、現在でも教育省が作成・印刷・配布している。そのため、カンボジアの教科書の種類はいまでも1種類しかない。

2-4) 都市部や近郊の学校の校舎について

今回視察した小学校は、都市部およびその近郊の小学校である。シェムリアップのワット・ポー小学校はコンクリートでできた2階建てで、全80クラス、児童数4,428名という大規模校であり、日本の小学校と比較しても全く見劣りしない。また、ベルギーの援助で建てられたシャムリアップ小学校教員養成校およびその付属小学校も実にきれいな校舎や学校園であった。シェムリアップからプノンペンへ向かう国道沿いにある学校は、車中からではあるが、きれいな校舎のように見受けられた。

シェムリアップ近郊のプク郡のパッパン小学校は、田んぼの真ん中にあり、7クラス生徒数282人、先生6人に対して、窓もない小さい建物に教室が3.5室、屋外にトイレ1つ、井戸2つ（1つは日本の援助）という、今回訪問した中では、一番小規模な学校である。訪問した日が10月から全国的に始まったばかりの毎週木曜日の「労働の日」にあたり、子供たちは校庭の掃除をしており、授業を見ることはできなかったが、黒板も韓国のNGOの寄付であった。

学校教育はどこまでをカバーすべきかという問題は難しい。例えば、カンボジアでは教科としての音楽はない。従って、基本的に音楽室はなく、楽器もない。運河の多いオランダでは子供に水泳を習わせるが、小学校にはプールも体育館もない。水泳を習うのはスイミングスクールである。確かに、パッパン小学校の校舎や設備は日本の小学校に比べると大分見劣りし、衛生状態もいかがなものかと思える。しかし、地震も台風もなく、一年中暑いカンボジアでは、一斉授業を行うだけなら、日本人が第一印象として感じるほどには校舎自体に不便はないのかも知れない。

3. 中学校教育教員養成校における理科教育

カンボジアでは、小学校教員は全国に18校ある初等教育教員養成校（PTTC : Provincial Teacher Training Center）で、中学校教員は全国に6校ある前期中等教育教員養成校（RTTC : Regional Teacher Training Center）で、それぞれ2年間で養成される。JICAの担当者のお話では、理科の教員数はPTTCで約40人、RTTCで約50人とのことであった。今回の視察では、シェムリアップの初等教育教員養成学校とプノンペン近郊のカンダール州のRTTCを訪問した。このうちカンダール州のRTTCでは、教員に対して理科の実験方法などを指導するため、千田沙也加青年海外協力隊員が活動しており、話を聞くことができた。協力隊員は、カウンターパートナーとして、現地の教員に教える立場で派遣されており、直接学生に教えることはない。

3-1) カンダール州 RTTC の概要

カンダール州 RTTC は、カンダール州、コンポンチェナン州、コンポンスプー州の3州の中学校教員を養成している1学年約300人のRTTCである。授業は、7時から11時と、昼休みを挟んで、14時から17時までであり、土曜日午前中に授業を行う。一週間あたりの理科の授業数は、12時間程度である。理科は、生物・地学コース、数学・物理コース、物理・化学コースの3つのコースに分かれており、授業の内容は、基本的には中高の内容である。どのコースにするかは受験の際に志望する。訪問した10月14日は、あさってに迫った入学試験の準備中で、一部のクラスでは庭の清掃を行っていた。カンボジアでは大学生も清掃する。授業は60分または60分 x 2で行われる。理科の授業は行われていなかったが、授業中の他教科のクラスの授業での学習態度はまじめであった。

3-2) 援助物資があったとしても

見学した生物実験室には、顕微鏡や人体模型があったが、実験台は古い木製であり、実験室自体も日本の中学校の理科実験室よりも小さいくらいであった。また、日本から送られた数台のオリンパス製の実態顕微鏡は、千田協力員が行くまで長年開封されていなかったそうであり、また、来年3月の帰国の後は、使用される可能性が低いとの話であった。

このRTTCの学生の特徴として、「本質的なこと、何のためにやっているのかを理解しないで、やれといわれたことを形だけやっている」という印象を持っていた。何のためにやるのか、その意義を理解していないとすれば、いくら実験器具があったとしても、やはり、使用されることはないであろう。

3-3) 現職教員に研修はすれど

ときどき周辺の中学校教員の研修を行い、実験することがあるそうである。その際には、中学校の教員も興味を持って実験してくれるが、かといって中学校に帰って、授業に役立てるようなことはないとのことであった。しかし、小中学校の現場に理科室がなく、教科書でも実験を扱わないのであれば、それも当然であろう。

4. 国立教育研究所での理科教育教員養成

4-1) 研究所の概要

国立教育研究所（NIE : National Institute of Education）では、村山専門官をはじめとする4人の日本人スタッフから話をお聞きした。NIEはカンボジアで唯一の高校教員の養成を主とした教育機関であり、大学をでた学生約500人強が1年間にわたって学ぶ機関である。学生は、その1年間で、教育学、教科内容、心理学、コンピューター、教育実習など一通りのカリキュラムを履修する。教育実習の期間は、年のよって1ヶ月～2ヶ月程度である（去年今年は1ヶ月）。基本的に落第させず、卒業試験が資格試験になっているため、ほとんどの学生が教員免許をもって卒業することになる。卒業生の多くは高校教員になるが、教育省やRTTCやPTTCの教員になるものもいる。

PTTCおよびRTTCのように、NIEの学生も基本的には授業料はなく、逆にお小遣い程度（NIEの学生は2.5ドル/月）の資金援助がある。PTTC、RTTC、NIEを卒業して小中高の教員になっても、教員の給与は、2年間貸している状態になる。詳しい制度はよくわから

ないが、2年以内に退職するとその間の給料がもらえない制度であり、新卒教員の民間への転身を食い止める手だてとうことであった。PTTCの卒業生は、特に男性は教員となって残る率は高くない。

特に小学校教員は女性が多く、男性が少ない。これは小学校教員の給与が低く過ぎて、男性が結婚できないことによるとの話であった。

4-2) NIEでの理科教育

村山専門官の案内で、物理、化学など、理科関係の実験室を視察した。それぞれの実験室には、準備室とスタッフルームが併設されている。高価な機器類があるわけではないが、例えば、化学実験室では、各実験台は新しく、簡易ドラフト、大型乾燥機、簡易蒸留水製造装置などもあった。準備室には小分けされた器具類がきれいに棚に収納されていた。日本でいえば、教育学部系の学生実験室のような雰囲気である。学生実験室としては山口大学教育学部よりもよいのではないかと思うほどであり、十分ではないにしても、理科教員養成の機能は担保されていると感じた。

また、たまたま化学オリンピックに出場する数人の高校生が指導を受けていたが、皆まじめそうであり、その熱心さが伝わってきた。

5. カンボジアの理科教育支援でできることは何か

5-1) どのような支援がなされているか

カンボジアは現在、「被援助大国」といっても過言ではない状況のようである。例えば、マラソンで活躍した有森裕子氏のNGOでは、体育の指導要領の作成等を行うプロジェクトを行っていたそうであるし、シャンティ国際ボランティア会も様々な教育に関する支援活動を行っている。最近も某テレビ番組でオークションを行い、収益金でカンボジアに学校を建てるという番組があった。シェムリアップ近郊で視察したトンレサップ湖の湖上小学校も、以前、日本からの援助で建設された小学校である。JICAでも、年々様々な方面から多くの支援の提案があり、支援間の調整にも多忙を極めるといった状態であった。具体的な教育内容の支援でも、例えば、広島大学を中心とした教育支援のプロジェクトでは、ササースダム郡にあるササースダム中核小中学校を中心として、近隣の小中学校教員向けの研修計画が進行中である。まあ、理科教育に特化したJICAのSTEPSAM IIというプロジェクトでは、カンボジアの全RTTC6校と全PTTC18校に理科教育の協力隊員を配置する計画であり、10月時点の話では、RTTCはもうすぐ全校に、PTTCには既に6-7校に協力隊が入っているということであった。

5-2) 山口大学としてできる理科教育支援は何か

カンボジアは今、支援しやすい国となっている。日本からだけでなく、ベルギー、スイスなどのヨーロッパ諸国や、韓国などからの支援も非常に活発であった。高層ビルも建設中である100万都市プノンペンにいと、いまさらカンボジアで山口大学が支援する余地があるのかと思えたほどである。カンボジアよりも支援を必要としている途上国の方が多いのかも知れない。かといって、宿泊する場所もないような国やカンボジアでもあまりに辺鄙な地域では、実際に行く人が倒れてしまう。

どの国を支援の対象にするのかは、もう少し視察を行って結論を出す方がよいと思われるが、もし、カンボジアをターゲットにするならば、現在教育学部の理科教室を中心に山口県内で行っている理科教育支援プロジェクトが、一つの支援モデルになると考える。

このプロジェクトは「「ちゃぶ台」方式による協働型教職研修計画」という、文部科学省の「専門職大学院等教育推進プログラム」に採択され、平成19-20年度に実施しているものである。理科教育で活躍している小学校教諭にコーディネーターを依頼して協力を仰ぎながら、その先生が勤務している地域の学校の先生で必ずしも理科を得意としていない先生のスキルアップ・資質向上を目指した活動を中心に、大学から車で実験道具を小学校現場まで運んで、出前講義を行ったりしている。理科室がない小学校に、車で実験道具ごと運び込み、理科の出前授業を行うと同時に、教員の理科に対する意識の向上を含めた研修を行っている。拠点としてNIE、サテライトとしてRTTCやPTTCの協力隊員をコーディネーターと見立て

ると、ちょうど今行っている私たちのプロジェクトと同じ図式が描けるように思われる。

5-3) 協力隊員を送り出す側に求められるものは何か

カンダール州 RTTC の千田協力隊員は、名古屋大学国際開発研究科の1年生であり、大学は休学中である。名古屋大学は国際協力に積極的な大学とのことであるが、今回のカンボジアでの活動は、大学とは無関係に、彼女の意思で決めたそうである。彼女は「広島大学では海外での活動を単位化できる制度があると聞いており、あれば少しは海外に出やすくなるのではないかと話していた。山口大学で現在このようなケースがあるかどうかは把握していないが、将来的に途上国に対する教育支援を充実させるということであるならば、山口大学としても重く受け止めるべき発言であろう。

シェムリアップのワット・ポー小学校で音楽の協力隊員として活躍している北海道出身の田中千種隊員は、北海道で臨時教員を経験したのち、JICA に応募し、現在に至っている。来年3月に帰国予定とのことだったと思うが、帰っても採用試験で何か特別な優遇措置があるわけではない。しかし、彼女のように、楽譜のないカンボジアの歌の楽譜を作り、不要になった楽器を日本から多数送ってもらい、カンボジア語で子供たちを指導し、演奏会まで開けるようにした力量を考えると、海外で地道に活躍する協力隊員の苦労が何らかの形で報われる制度が必要ではないかと思われる。

6. 最後に

カンダール州 RTTC の千田協力隊員の話のように、教員だけ呼んで研修を行っても、実際に現場で生かす状況にないカンボジアでは、積極的に車で学校を回ることも有効と思われる。そのためには、資金や物資だけでなく、中心となる組織や人材が欠かせないし、多くの困難があるであろう。カンボジアでの支援のあり方を考える中で、私たちが現在行っているプロジェクトのノウハウが、途上国の理科教育の支援にも活かせるのではないかと予感する。ここでは報告していないが、カンボジアで唯一の総合大学であるプノンペン王立大学の理系の授業や実験室の視察も行った。理学部生は1学年250人おり、高価な機器はないにしても、学生実験室も多く、学生の実験態度もまじめであった。現地大学の協力を仰ぐことも必要かも知れない。

今後、山口大学の「国際協力プラットホーム」や今回の派遣母体となった教育学部の「発展途上国への教育学部教育国際支援プロジェクト」など、国際協力に取り組む体制がさらに充実し、実際の支援活動が活発に行われるようになることを期待したい。

最後に、今回の視察のすべては、教育学部理科教育選修の阿部弘和教授が企画し実施したものであることを申し添えるとともに、阿部先生に心よりに感謝申し上げます。

V 国際協力と途上国への援助活動

阿部弘和

私はほぼこの一年の間に、それぞれは短い期間であったが、ラオス、バングラデシュ、ベトナム、そしてカンボジアに渡航し、その様子を実際に見聞することができた。この4つの国も海外からの援助を受けながら、発展途上にある国家である。これらの国はいずれも政府が強い権限をもっているが、行政能力(遂行能力)に問題ある点などは似ており、また、統計上に現れた数字にも大差はないが、例えば、経済的・社会的な豊かさ、発展の速度などにはかなり違いがあるように感じられた。ここではどのように違うかを詳細に述べないが、バングラデシュの国造りのあり方が印象的であった。バングラデシュは長い歴史や文化をもっているにも関わらず(独立国家としての歴史は短い)、4ヶ国の中では最貧で、将来においても多くの面で他の3国には遅れをとるであろうと思われた。バングラデシュは政府が安定していないせいもあるが、グラミン銀行やNGO(BRAC)などの非政府機関が国の発展に

大きな役割を果たしていると感じた。すなわち、両機関とも農村や都市の最も貧しい層の人々の自立を目標として、それらの人々に援助を行い、効果をあげつつある。国家の繁栄を第一とする隣国のインドとは対照的である。普通、個人より国家を優先するのは経済的発展への常套の戦略とされているが、必然の結果として、貧富の差など社会的格差が生じてくる。そして、格差がある社会は不穏であり、犯罪の増加など深刻な社会問題が生じるのは歴史的事実である。我が国も実感をもって現在それを認識しつつあるように思える。私はこの10年の間にこの4ヶ国以外の東南アジアの国々を見ることができた。貧富の差が目立つ国、あるいはそのような地域では旅人として、危険を感じ慎重な行動が必要であった。途上国への旅は、我々自身も学ぶ事が多い。

今回の調査旅行の目的はカンボジアの学校教育と教員養成の現状と課題を探ることにあつた。カンボジアと隣国のラオスは、植民地時代以来辿った近代の歴史—独立運動、ベトナム戦争の影響、それに続く政治的・社会的混乱と内戦—は極めて似ている。そして、教育分野においても、教育施設・設備の不足・不備、内戦による人的資源の損失による教師不足と資質の問題、教育制度整備の混乱（迷走）、教師養成の遅れ、低い就学率、教科書の不備など、両国は極めて似た課題を抱えている。カンボジアの問題解決への取り組みは、現在教育青年スポーツ省で主要な地位にある Nath Bunroem 氏の指針（Teacher Training System in Cambodia）に沿って着実に進行しているように見えた。その歩みは明らかにラオスよりはるかに着実に速い。おそらく Nath Bunroem 氏のリーダーシップが発揮されているのであろうが、諸外国からの援助の差も大きな要因であるように思えた。今回の調査旅行では地域に限られてはいたが、例えば、全ての学校の校舎は既にコンクリート製のものとなっていた。あるいは校舎の一部はベルギーの機関が建設し、残りは日本から、黒板は韓国からのような状況も普通に見かけた。人口の多いプノンペン市では小学校校舎の3階化も既に進行していた。「もうハコモノは要らない」としばしば感じた。これに対して、ラオスはベトナム戦争時の大型不発弾の除去さえ遅々として進行していない忘れられた国となっている。国際的な援助の効果、力は大きい。『被援助大国カンボジアの状況には、私も考えさせられます。総量としてというよりは、ドナー側が入りやすいところに過剰に入っており、本当に必要なところに届いているかどうか、正直分かりません』（桑山尚司、私信）。私も同感である。例えば、乳児死亡率が高いなど保健衛生・医療に関しては極めて劣悪な状況にある。都市としては近代化が著しいシエムリアップやプノンペンにおいても、小児病院前には夜明け前から、子供を抱いた母親の長蛇の列ができていたのが印象的であった。また、教育分野においても、山岳地帯や僻地には援助を必要とする学校も多数あることは容易に想像できた。一方、日本においても学校が廃校となり、あるいは病院が縮小され、限界集落と呼ばれる地域が増えつつある。どちらの国においてもこのような状況の改善は容易ではなく、長期の努力が必要であろう。

しかし、例えば日本からも、カンボジアに赴き、現地の学校で教育内容の改善のため日々、努力している、JOCV の鍵山彩氏、田中千種氏、千田沙也加氏のような人々が少なからずいることは記しておかなければならない。カンボジアへの援助活動は、その質、内容が問われる時期になっていることは確かである。

日本（あるいは日本人）はカンボジアで展開されている様々な国からの援助活動において重要な役割を果たしていると思われるが、そのあり方についてはやや残念と感じることもあった。日本からの大きな援助の場合、数年間のプロジェクトで終わることが多いように思えた。これに対して、例えばベルギーからの援助活動では、その後も現地にスタッフを駐在させて、持続的な支援を維持していた。私は鳴門教育大と JICA がラオスで行った理数科教育改善プロジェクト（SMATT）に補助的なメンバーとして参加した経験がある。SMATT は画期的な内容で、ラオス教育省の評価も高く優れたプロジェクトであったと信じている。しかし、スウェーデンの機関によるプロジェクトでは、その後もラオスの大学や TTC 教官を同国の大学院に持続的に招請し勉学する機会を与えており、SMATT で知己を得た彼らの関心が常にそちらに向いていると感じた。SMATT のメンバーの一人として悔しく、残念な思いを抱いた。

今回の調査旅行にあたって事前に有益な情報を与えて下さった、広島大学国際協力研究科の田畑佳則教授から、カンボジアからの帰国後示唆に富むお便り頂いた。以下長文ではあるが引用する。『途上国への援助ですが、昨日の会議で、シエラレオネからの参加者が、**National Aspiration** の実現のために教育が重要だというので、あなたの国は何を実現し、どのような国になりたいと思っているのかと質問しましたら、貧困の削減以外にははっきりした答えは返ってきませんでした。国際協力研究科の理科教育にアフリカから何人も学生が来ています。彼らは一様に教育は重要だというのですが、では何のために教育が重要なのか、彼らの国をどのような国にしたいのか尋ねると、わからないと答えます。目標がはっきりすれば教育の内容も水準も計画のたてようがあるのですが、教育は人権だとか、貧困削減が目標だと言っているようでは具体策は出しようがありません。円借款などの国際援助は、武力によらず、お金による、ただ形を変えた植民地化以外の何者でもないわけで、この辺りに国際援助の基本的な問題があるような気がします』(田畑佳則、私信)。私は、それがたとえ間違った方法や結論であっても、その国のことはその国の人々で決めるべきであると思っている。そして、そのような自立への活動の手助けが国際協力であると感じている。

今回の旅行では大きな成果があったと思っているが、我々が今後何をすべきかについての具体的な結論は得られなかった(具体的な活動プランが浮かんでこない)。しかし、ラオスでもそう思ったが、この国でもそう思った個人的なアイデアはある。カンボジアでは、例えば、大学や教員養成校の教員は、援助によって先進国で渡り学ぶ機会、人々は決して少なくないはずである。あるいは先進国がカンボジア国内で開催する教育改善プログラムなどに参加した教員は少なくないはずである。問題はそれで終わり。その後、彼ら自身が主体的に専門性や資質を高める機会や場がほとんどない(していない)ことである。しかし、意欲があっても、そのような努力を一人一人で行うことは難しく(心理的に面倒でもあるし)、協力しながら行う方が楽である。同業者が一同に介する場合は「学会」とか「研修会」と呼ばれるものである。カンボジアにもそのようなものがあって欲しいと願っている。しかし、カンボジアはその政治体制からか、必ずしも個人が自由に発言できない状況が残っているように感じられた。そこに第三者としての我々が手助けをする余地、あるいは、意味がある。『カンボジア生物学会』や『小学校教員研修会ーブノンペン大会』の設立や運営のアドバイザーやオブザーバーとして我々も参加し、また、旅費や運営費も集める(とりあえず拠出する)。そして、一方では我々も「不登校児童と日本の学校教育」とか「理科の学力低下」の演題で参加しなければならない。このようなプロジェクトを提案すると、どのような効果があるか評価せよとの問いが寄せられるに違いない。しかし、人の活動の全てが数量化して評価できないことは明白である。電話よりも、ITよりも、人と人が顔を合わせて接する方が、はるかに多くの事を為し遂げることができる。それが世間話から始まっても何の問題もない。集まることに意義があり、全てはそこからスタートすると信じている。

おわりに

この調査旅行にあたっては JICA カンボジア事務所、JICA 中国のほか、多くの方々からご協力、ご援助を得ました。その方々のお名前を記し、心よりお礼申し上げます。

田畑佳則氏(広島大学)、桑山尚司氏(広島大学)、堀田桃子氏(JICA カンボジア事務所教育セクター担当)、小川紀子氏(カンボジア JICA プラザ)、JOCV 隊員の鍵山彩氏(シエムリアップ PTTC)、田中千種氏(ワット・ボー小学校)、千田沙也加氏(カンダール・コンポンチュナム RTTC)、村山哲也氏(STEPSAMII 担当官)、U.K. Vichidh 氏(NCT New Cambodia Tours)。最後に、この調査旅行に際し、終始励ましと適切なお助言を頂いた『国際協力活動推進プラットフォーム』代表の今津武氏(山口大学経済学部)に深く感謝致します。

なお、この調査旅行は『国際協力活動推進プラットフォーム』および山口大学教育学部学部長裁量経費(平成 20 年度)からの資金援助によって実施された。